

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	30 / 2011 / 31-32
タイトル	謎解き遊びの博物誌 「この指とまれエ」の起源と赤トンボ・サザエの角vsウニの棘
著 者 名	天内康夫

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

謎解き遊びの博物誌

「この指とまれエ」の起源と赤トンボ・サザエの角vsウニの棘

第3代 天内康夫

1. 「この指とまれエ」の起源と赤トンボ — 棲息密度はむかしの1000分の1? —

かつては「～する人、この指とまれエ…」ということばがあった。もう死語になったかもしれないが、子どもたちが遊び仲間を集めるときに使った、各地に共通する掛け声だ。この表現はいつたい、どこから来たのか。以下は私の推理である。

つい先日のこと、「田んぼの生きもの調査」に関する勉強会で、神奈川県生命の星・地球博物館の蒯部治樹学芸員の話が聞けた。各地で手に負えぬほど増えているアメリカザリガニの在来生物への影響や、逆にいまや異様に数を減らしつつある日本の赤トンボの話が中心であった。



[写真1]「赤トンボ」の代表的な1種、アキアカネ

レクチャーの中で、「青森や秋田では、赤トンボの数が、半世紀前の千分の一程度にまで減っている、という報告がある」と聞き、子どものころの、赤トンボとの懐かしい関わり合いの数々を思い出した。

『赤とんぼ』の歌には、どなたもご存知の「夕焼け小焼けの赤とんぼ…」のほかに、昭和10年ごろの小学校唱歌の教科書に載ったものがある。

「秋の水、すみきった流れの上を赤とんぼ、何百何千、そろって上(かみ)へ、ただ上(かみ)へ、のぼっていくよ、のぼっていくよ」、「秋の空、金色の夕日に浮かぶ赤とんぼ、何百何千、並んで西へ、ただ西へ、流れていくよ、流れていくよ」(尋常小学唱歌『赤とんぼ』)

この原風景は当時、ふるさとの津軽に限らず全国のどこでも、ごくふつうに見られたはずである。

赤トンボがそろって川上に向かうのも、西の空に流れていくのも、川上や西方から吹く風の流れに逆らっているのにすぎない動物の行動(走流性)だけれども、問題は、そこに飛ぶトンボのおびただしい数である。大げさに言えば、秋の空を埋め尽くすほどの群れであったように、私には思い起こされる。

なにしろ、子どものころの秋といえば、人差し指を頭の上につきあげて立つと、指先には必ず赤トンボがとまった。そのトンボの足を、ひよいと親指でつまむと、赤トンボが誰にでもわけなく捕まえられる…ほど、棲息密度は高かったのである。この、「指を上にあげて立つしぐさ」が、遊び仲間を集めるとき「この指とまれエ…」に転じたものであったはずだ。

うじゃうじゃいたトンボは、子どもたちの格好の遊び相手だった。羽を、3ミリちぎり、5ミリにふやして、どれだけ切ったら飛べなくなるか—、あるいは松の葉を赤とんぼのお尻に差し込んで、その不自由な飛び方を確かめる—。思えば残酷な遊びをしたものである。なにしろ、群れ飛ぶ赤トンボには、地面を這い回るアリの数にも相当する程度の認識しかもっていなかった—のかも知れない。もっとも、そんな遊びは一、二度しただけで、すぐに飽きてしまったのだけれど…。

数はわずかになったが、今でも赤トンボは都会地にもいる。秋おそく、通行人に踏まれてつるつるに磨かれたマンホールのふたに、必死に産卵行動をとっているアキアカネを目にして、ものの哀れを覚

えることもある。しかし、彼らの卵が休眠状態のまま冬を越し、春になってから田んぼや池の水で孵化すると知れば、これが必ずしもむだな行動でないことが飲み込めて、少しは救いがある。アキアカネなどの卵は、ヤンマなどと違って卵越冬し、春に孵化してヤゴになるのだとか。春先に田を起こして下肥や厩肥をまき、水を張ってプランクトンを育てる昔からの米作りならば、赤トンボにとって、ほとんど干上がった秋の田んぼは絶好の産卵環境だったに違いない。

田起しや苗づくり、田の草取りなどの作法がすっかり変わったいま、日本に赤トンボがすみにくくなったのは無理からぬことかもしれない。

2. サザエの角vsウニの棘 — 環境と形態の変異を考える —

ご存知、「梅は咲いたか桜はまだか、柳アなよなよ風次第、山吹ア浮気で色ばかり」の端唄『梅は咲いたか』の2番には、「あさり蛤しじみはまだか、鮑アくよくよ片思い、さざえは恪気で角ばかり」とつづく。いうまでもなく、「山吹浮気で色ばかり」は、浮気女に子どもができにくいことと、色華やかなヤマブキの花に種ができないことをかけており、「さざえは恪気で…」は、サザエがほかの巻貝と違って、貝殻にがっちりした角をもっていることを、ヒステリー女の焼きもちのひどさになぞらえている。お座敷用戯れ歌の面目躍如だ。



[写真2] 三浦三崎のムラサキウニ

確かに、私たちが湘南の磯や地元神奈川の魚屋、レストランなどで目にするサザエには、殻に数本の角が生えていて、いかつい風格がある。しかし、瀬戸内でとれる内海産のサザエには角がなく、どこか女性的な感じを与える。

このサザエの角のアリ・ナシ現象が、育つ磯の波の荒さに関係することは、古くから知られていた。沖でプランクトン生活を送っていたサザエの幼生が、海底に降りて岩磯で生活をはじめてから、受ける波の振動レベルによって殻の形成に違いができるようだ。ところが、ウニの棘の長さにも土地柄があることに、先日はじめて気がついた。目からうろこ!である。

仲間うちで予定されていた磯観察会の下見に、三浦・葉山御用邸の近くの長者ヶ崎まで出かけて、岩磯を漁っていた。おりしも春の大潮にあたり、潮溜まりではさまざまな獲物が見つかる。岩の隙間からムラサキウニを引っ張り出したときのことだ。なんだか少し異様——というか、形がいびつである。からだの片側だけ、棘が短くなっていて、それが大小どの個体も同一パターン!なのだ。そのためか、三浦三崎のムラサキウニたちは一見、いかつい感じを与える。これに対して学生時代を思い起こせば、青森・陸奥湾で採取した発生実習用のキタムラサキウニたちは、同じ長さの棘が均一に生えていて、いかにもスマートだった。…

通りかかった漁師さんに尋ねたところ、「三浦のウニはみんなこうだよ。岩の隙間に潜りこみやすいように、前の棘は短くなっているんだ」とのこと。どちらが前か後ろかはわからないが、説得力のある説明であった。サザエの角と同様に、荒い波がムラサキウニの棘を長短違えて、ガッチリと鍛え上げたようである。そういえば、とげがやや短いアカウニも、長さが不均一な棘姿であった。

環境は人をつくる。動物もつくる!!—「あの至福の味をもたらすウニさえも、きびしい環境で育てば、ツツパリ姿に変身してしまう…」という孟母三遷の教えは、どんな動物の世界にもあてはまるものらしい。